

情報メディアと現代社会

～「現実世界」と「メディア世界」～

井上 宏著



関西大学出版部

ISBN4-87354-397-5

C3036 ¥4100E

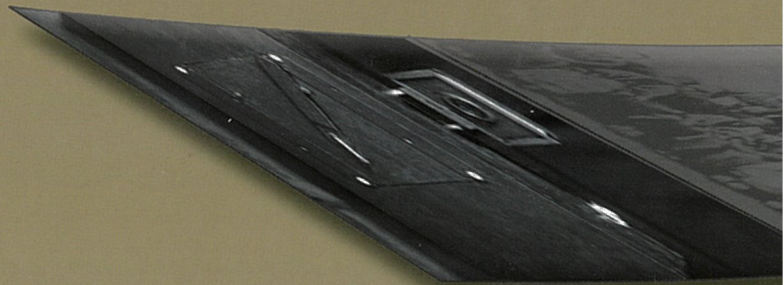


9784873543970

定価 (本体4,100円+税)



1923036041009



情報メディアと現代社会

～「現実世界」と「メディア世界」～

井 上 宏 著

関西大学出版部

【本書は関西大学研究成果出版補助金規程による刊行】

はじめに

私のメディア研究は、テレビから始まった。1960年（昭和35）にテレビ局に入社し、テレビの現場に身をおくことになって、テレビへの特別な関心が芽生えたのであった。

わが国のテレビ放送が1953年（昭和28）に始まって、2003年（平成15）は50周年に当たる。半世紀が経過したわけである。私が入社した読売テレビ放送は、1958年（昭和33）8月に開局しており、私はそれから1年7ヵ月経って入社したのである。「テレビの創世記」と言われる時期であった。テレビは、まさに新しいメディアで、今日の言葉で言えば、ニューメディアそのものであった。遠くの画像が、あの小さなブラウン管にどうして映るのか、テレビ自体が不思議な存在であった。それまでの身近なメディアと言えば、新聞・雑誌、ラジオ、映画、書籍の類いであったが、テレビはラジオの延長でもなし、映画の延長でもなく、視聴覚に訴える電波メディアとして、特別の関心を集めていた。

「テレビとはどんなメディアなのか」「テレビで何ができるのか」「テレビの番組とは何なのか」「テレビはどんな影響を与えるのか」など、テレビに投げかけられる問いは多かった。それらの問いは、大学の研究者ばかりでなく、現場で仕事をする者にとっても切実な課題であった。私自身も、日常の仕事のなかで、そうした問題について仲間と議論し合い、思索もして論文を書いたりしていた。幸い私の勤務する読売テレビは、『YTV レポート』というテレビ研究誌を発行していて、それに投稿する機会があり、そのみならず朝日放送が出版する『放送朝日』や日本民間放送連盟の『月刊民放』という研究誌からも寄稿の機会が与えられた。

時には、大学の先生方と共同研究する機会もあった。『YTV レポート』で「テレビ番組研究」というシリーズ企画があって、番組を見てコメントをし合い、その議論をまとめていくという方法で連載を続けたこともあった。

1973年（昭和48）に関西大学社会学部に転職することになったが、13年間をテレビ局という送り手に身をおいて経験したことは、その後の私の研究に

とって大きな資産となったし、私はまたその資産を生かして研究したいと思っていた。

「ニューメディア」の登場までは、ブラウン管に映るものと言えば、地上波テレビだけで、それが「テレビ研究」ということであったが、1980年頃から「ニューメディア」が登場するにつれ、私の研究も幅を広げて行くことになった。ブラウン管がテレコミュニケーションとつながっていくと、それも研究対象のうちも含んでゆかざるをえなくなり、私の研究も「放送と通信」のメディア研究へと傾いて行った。

新しいメディアは、それなりに新しいコミュニケーションの様式を生み出す。多様なメディアの氾濫は、また多様なコミュニケーションを生み出し、それらは「社会と個人」を巻き込んで「高度な情報化社会」を作り出す。私の関心も、いきおいこの先にどんな社会が到来するのかという問題へと発展して行った。

アカデミズムの普遍性を求める「専門の論理」は、それ自体が「独自の位相」をもっており、また矛盾に満ちて絶えず動いて止まない現実には「現実の論理」がはたらいっているが、両者が乖離してしまつては研究の意味がなくなる。私はいつも論文を書き著書を出版するとき、現場の人々にも読んで欲しいという願いをもっていた。

本書は、これまでに私が書いてきた論文を整理して、研究者・学生のみならず現場の方々の参考に供することができればと思って編んだものである。私自身の着想が生きているものを基準として選択した。何か参考になるところがあれば望外の喜びである。

第1章から第3章までは、「コミュニケーション」と「メディア」を研究するに当たっての私の基本的考え方についての論文を収録し、同時にテレビからニューメディアの発展に至る歴史をまとめている。

第4章と第5章では、テレビに関する論文を収録した。テレビというメディアをどのようにとらえるか、どんな社会的コミュニケーションを担うメディアと考えるか、といった問題から「テレビ上の現実」をどのような現実と考えるか、さらにはテレビを「体験する」ことの意味、テレビが生み出す文化的現象に関する論文を収録した。

第6章から第9章までは、ニューメディアの発展による「テレコム社会」の到来が告げられるようになって以来の論文を収録している。ニューメディアの中でもケーブルテレビに焦点をあて、特にその先進国であったアメリカのケーブルテレビを取り上げている。第7章の「アメリカのケーブルネットワーク」は、その研究を続けて一冊の書籍にまとめようとして取りかかったが、果たせずに終わったものである。

第10章は、2003年1月14日（火）に関西大学総合情報学部で行なった私の「最終講義」の講義内容をまとめたものである。

メディアの変遷はまことに目まぐるしく、事実やデータは、論文執筆時点のままになっている。その時点での記録として一定の意味があると思うが、そのままの点のご勘弁をいただき、内容の趣旨を読み取っていただければ幸いである。

論文の初出は、巻末にまとめて表示した。本書をまとめるに当たって、できるだけ初出の状態を保つように努めたが、重複部分もあり、抜粋や若干の補筆をしたことをお断りしておきたい。

テレビ局勤務の時代から関西大学を退職するまでの間を思い返すと、私はどれだけ多くの学兄のお世話になってきたかを思わずにはおれない。ここに収録した論文も、そうした人々の指導や励まし、支えがあって書かれたものであり、関係者の方々に厚く御礼を申し上げる。また、これまで背後で私を支えてきてくれた妻の陸美にも感謝の意を表したいと思う。

このような形で本書を刊行できるのは、関西大学の出版助成のおかげであり、記して感謝の意を表する次第である。

平成16年2月

著者

目 次

はじめに

第1章 コミュニケーションについて	1
1. コミュニケーションとは	1
(1) コミュニケーションの両義性	
(2) 「共同性」とコミュニケーション	
(3) バーバルとノンバーバルのコミュニケーション	
2. コミュニケーションの形態	7
(1) 直接的と間接的	
(2) 全体的と分節的	
(3) 双方向的と一方向的	
(4) 閉鎖的(クローズド)と開放的(オープン)	
第2章 メディアについて	17
1. メディアとは	17
2. 現代のメディア状況	18
(1) 空間系メディア	
(2) ハードコピー系メディア	
(3) ソフトコピー系メディア	
第3章 ニューメディアとメディア発展史	23
1. マスメディアの発展	23
(1) マスメディアの盛衰	
(2) プレ・ニューメディア	
(3) マスメディアの隆盛	
2. ニューメディアの時代	28

(1) ニューメディアの登場	
(2) マスメディアの変容とニューメディア	
多メディア・多チャンネル	メディアの融合
ユーザー主導型	グローバリズムとローカリズム
3. マルチメディアの時代	37
(1) マルチメディア時代の到来	
(2) 放送のデジタル化	
(3) インターネットの時代	
第4章 「現代の広場」としてのテレビ	45
1. 「広場」のコミュニケーション	45
(1) 拡大化した環境	
(2) 「広場」のコミュニケーション	
(3) 中継的連鎖環	
2. 「広場」としてのテレビ	53
(1) 伝達と交流	
(2) 一義性と多義性	
(3) 画一性と多様性	
(4) 受身性と参加性	
(5) 事後性と同時性	
(6) 検閲性と自由性	
(7) 「硬い」表現と「柔らかい」表現	
(8) 「広場」と視聴者	
3. テレビの送り手～放送理念としての「広場」	68
(1) 「編成」とは何か	
(2) 編成の構造	
(3) 経営・編成・制作・営業の関係	
4. 批評活動と放送	82
(1) 外部の批評活動	
(2) 「媒体価値」の批評	

(3) 「番組価値」の批評	
(4) 「商品価値」の批評	
(5) 三つの価値の「位相」	
(6) 視聴率の「内圧」と「外圧」	
第5章 テレビと映像文化	91
1. テレビ映像の論理	91
(1) 虚構の「現実」化	
(2) 現実とそのコピー	
(3) 「受動性」と「能動性」	
(4) 映像と言葉	
(5) 現場中継と演出	
(6) テレビ技術の効果	
(7) 現実の劇化	
(8) 「事実性」と「想像上の融即」	
2. ブラウン管上の事件	111
(1) 現実の「コピー」	
ブラウン管の映像　「皇太子ご結婚」の全国中継	
事実を「現実化」する　シカゴのマッカーサー・デー	
ハプニングをとらえる	
(2) 現実環境と擬似環境	
「擬似環境」のリアリティ　東大安田講堂の「攻防」	
擬似イベントは演出される	
(3) テレビに映し出された現実	
ブラウン管上のイメージ　よど号乗っ取り事件	
全世界が見たアポロ11号の月面着陸	
浅間山荘事件の生中継　省略された国会中継	
現実の輪郭があいまいになっていく時代	
3. 映像文化としてのテレビ	123
(1) 映像文化	

映像文化の発展 日常化したテレビ映像

- (2) 映像の論理
 - 「論弁性」と「現示性」 「有縁性」と「規約性」
 - (3) 映画とテレビ
 - 映画映像 テレビ映像 スターとタレント
 - (4) テレビと大衆文化
 - メディアの連動 「バラエティー」としてのテレビ
 - (5) テレビと現実
 - テレビと現実認識 テレビ映像と行動
 - 映像リテラシー
4. 「体験」としてのテレビ 143
- (1) “母なる” テレビ
 - (2) テレビ意識
 - (3) リアリズムと楽の思想
5. タレント・ファンの社会学 163
- (1) 英雄からスターへ
 - (2) 映画とスター
 - (3) テレビとタレント
 - (4) タレントの素顔と仮面
 - (5) 音楽とスター
 - (6) アイドル
 - (7) 媒介者としてのタレント
6. 「ウルトラマン文化」の形成
 ～怪獣ブームをめぐるメディア連動～ 184
- (1) スーパーヒーロー＝ウルトラマンの誕生
 - (2) テレビ・イメージの派生と補完
 - (3) ウルトラマン・イメージの飽和と凋落
 - (4) 復活する怪獣ブーム
 - (5) 定着する「ウルトラマン文化」
7. テレビ映像文化の落とし穴 194

- (1) デジタル化の時代
- (2) 多チャンネルの行方
- (3) 視覚的世界の拡大
- (4) 映像リテラシー
- (5) 現実世界と仮想現実

第6章 テレコム社会 203

1. 「情報化」とテレコム 203

- (1) 「情報化」の意味
- (2) 「情報」の一般的定義
- (3) 物と情報は同一物の二面
- (4) 内なるものの外在化
- (5) 経験と勘からの脱出
- (6) 情報は対象を代理する
- (7) 情報は秩序を与える
- (8) 情報化による管理
- (9) 情報は行動の導き手
- (10) 情報公開の必要性

2. テレコミュニケーションの進展～ケーブルテレビと通信衛星.. 217

- (1) テレコム社会の成立
- (2) テレコムの特徴
- (3) モア・チャンネルへの欲求
- (4) テレビ概念の再検討
- (5) アメリカにおけるケーブルテレビの発展
 - ケーブルテレビの登場 規制の時代 1972年ルール
 - ケーブルの自由化 ケーブルテレビの発展と通信衛星
 - HBOと WTBS 1984年ケーブル法 (1984 Cable Act)
- (6) アメリカのケーブルテレビの現況
 - ケーブルテレビ加入世帯 ケーブル・システムの普及
 - ケーブル・システムの内容

ケーブル・システムのチャンネル容量
 ケーブル・システムの規模
 ケーブル・システムとMSO (Multiple System Operators)
 ケーブル・ネットワーク別対象加入者数
 ケーブルテレビと通信衛星

(7) アメリカのケーブルテレビの内容

再送信 自動表示サービス コミュニティ・チャンネル
 アクセス・チャンネル 衛星経由サービス
 リージョナル・ケーブル・ネットワーク
 ケーブル・ラジオ
 公共ネットワーク (Institutional Network)
 双方向サービス

第7章 アメリカのケーブル・ネットワーク 249

1. スーパーステーション 249

- (1) はじめに
- (2) TBS SuperStation
- (3) WGN
- (4) WWOR
- (5) その他のスーパーステーション
- (6) スーパーステーションの特徴

2. CNN & HEADLINE NEWS 263

はじめに

- (1) CNN (Cable News Network)
 CNNの誕生 SNC (Satellite News Channel) との競争
 ニュースの2チャンネル体制 内外に伸びるCNN
 CNNの組織 CNNの番組編成
- (2) CNN HEADLINE NEWS
 HEADLINE NEWSの歩み 番組フォーマット
- (3) CNN / HEADLINE NEWSの収入源

マーケティング	加入世帯収入と広告収入	
おわりに		
3. C-SPAN	292
(1) はじめに		
(2) C-SPAN を視聴して		
(3) C-SPAN の設立		
(4) C-SPAN の運営		
(5) 編成方針と番組		
Event of the Day	コール・イン (call-in) プログラム	
ナショナル・プレス・クラブ	America and the Courts	
Booknotes	Capital Agenda	Journalists' Roundtable
American Profile	その他	
(6) C-SPAN のオーディオ・サービス		
オーディオネットワーク I		
オーディオネットワーク II		
(7) C-SPAN と教育		
C-SPAN in the classroom	C-SPAN の教育利用	
(8) 番組の記録保存		
(9) 他国への広がり～イギリスの場合～		
(10) C-SPAN の特徴		
第8章 ケーブルテレビ～完全双方向映像システムの実験～	323
はじめに	323
1. システムの概要	324
(1) 実験地東生駒のプロフィール		
(2) システムの概要		
(3) ハイ・オービス開発の理念		
2. ハイ・オービスと住民参加の形態	332
(1) 「見る」参加		
(2) 双方向テレビへの参加		

(3) 番組出演への参加	
(4) 催物への参加	
(5) クラブ・サークル活動への参加	
(6) 話題への参加	
(7) システム運営への参加と番組制作への参加	
3. 「現実世界」と「メディア世界」	351
(1) 「現実世界」と「メディア世界」との相互浸透	
(2) 中範囲地域情報システムとしてのハイ・オービス	
(3) 現実過程としての双方向テレビ	
おわりに	357
第9章 「フレキシブル社会」に向けて	359
はじめに	359
1. 個人の「内部志向」の強まり～心の豊かさを求めて～	360
2. 情報化の進展～情報縁の広がり～	363
3. アイデンティティを求めて～身の文化～	364
4. 相互依存性の強まり～地球市民～	366
5. 「フレキシブル社会」に向けて	368
第10章 現代コミュニケーション・ライフ考	
～「現実世界」と「メディア世界」のはざままで～	371
1. テレビ研究からスタートして	371
2. 1980年代に入って～「ニューメディア」の時代～	372
3. 1990年代に入って～「マルチメディア」の時代～	375
4. 「ブロードバンド」の時代に入って	377
5. 私たちの生活を取り巻くメディア状況	379
6. 現代人のコミュニケーション・ライフの特徴	381
(1) 「ながら感覚」の一般化	
(2) 「メディア世界」の現実性	
(3) メディア依存の深化	

(4) 電子情報メディアの比重増大	
(5) 「現実世界」のオンラインへの移行	
(6) バーバル・コミュニケーションの偏重	
(7) 直接的コミュニケーションを避ける傾向	
7. コミュニケーション・バランス	387
(1) コミュニケーション・バランス	
(2) 直接的な人間同士の「ふれあい」	
(3) 笑顔と笑いの重要性	
初稿発表おぼえがき	393
人名索引	397